

〔研究論文〕

在日中国人児童のウェルビーイングに関する研究

—日本語能力に焦点を当てて—

楊 慕 姍・桜 井 美 加・助 川 晃 洋

昨今我が国では日本語指導が必要な中国語を母国語とする児童が増加している。中国人の子どもが経験する心理的ウェルビーイングの向上は日本社会に適応するための重要な要因であることが予測されることから、ウェルビーイングと日本語能力との関連性を明らかにすることを本研究の目的とした。在日中国人小学生 1 年生から 6 年生 120 名を対象として Kid-KINDL を参照したウェルビーイングや日本語能力などを測定する質問紙を作成し、調査を実施した。性別と学年別および「身体的健康」「精神的健康」「自尊感情」「家族」「友人関係」「学校生活」「ウェルビーイング」の 7 つの変量の差異分析を行ったところ、性差および学年別で有意差は見られなかった。一方、日本語能力とウェルビーイングに関連する 7 つの変量との差異分析を行ったところ、関連差は見られなかったものの、日本語の勉強を進められた経験があるなど日本語能力に問題のある子どもは精神的健康の得点が低く、間接的に一部の子どものウェルビーイングに影響を与えていることがわかった。

キーワード：ウェルビーイング 中国人子ども 日本語能力

1. 問題と目的

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の学校種別在籍状況」（2021）によると、小学校では 31,191 人、中学校で 11,283 人、高等学校で 4,295 人であり、小学生が全体の 65%を占める。また、「子どもの教育」（2020）の視点から、関連項目を概括したレポートの報告より、6 歳-14 歳の子どもがいる人に子どもの日本語能力について尋ねたところ、「日本において授業を十分理解できる」が 71.0%であった。一方、「日本において授業を理解するのは難しいが、日常生活ではあまり困らない」が 10.1%、「日常生活で、ときどき困ることがある」が 10.1%、「日

本語がほとんどできない」が 5.8%となっており、26.0%が日本での授業を理解できていないことがわかっている。日本語を理解できないままでは学力向上が望めないだけでなく、コミュニケーションが困難となり、成長してからも日本社会に馴染めないことが容易に想定されることから、小学校から日本語教育を充実させることが必要である。

学校における日本語教育は日本語学習の一面であり、児童を取り巻く家庭環境も重要である。谷淵(2009)は、日系ブラジル人の学校適応感を授業の理解度、授業への興味関心、登校意欲の3項目で調査した。その結果、日系ブラジル人児童生徒と日本人児童生徒の学校適応感には有意差は認められなかった。一方、外国人の親の地域参加と日本語能力は、子どもの学校適応につながることを示唆された。「外国にルーツを持つ子どもの言語環境の現実と展望」^[1]によると、外国にルーツを持つ子どもの言語環境は、家族間のコミュニケーションに使用される家庭言語、教授言語(学校で使用される言語)や社会の公用語など多言語環境である。日本に住む外国にルーツを持つ子どもたちも、家庭では家庭言語を用いて生活し、学校では日本語で学習する。つまり、国を越えて移動をする子どもたちにとって、子どもの家庭環境に基づいて、言語の発達については家庭で使用する言語の影響があることが示唆されている。

また、外国にルーツを持つ子どもにとって、言語問題はいじめを招き、いじめにあったと回答した人にその理由を聞いたところ、「外国人だから」が 51.7%と半数を超えた。以下、「日本人と習慣が違うため」が 27.6%、「日本語がうまく話せないから」が 24.1%、「髪の色や体格」が 20.7%などとなっている。日本語の習熟度によって子どもたちの将来が左右されかねないことが伺われる。さらに共生社会を目指す上では、在留外国人と日本人のコミュニケーションが不可欠である。外国人の日本人化を目指すのではなく、彼らの文化的背景を承認する多文化主義のもと、アイデンティティを認めつつ、日本語習得の順調さによる自信が学校適応を促進させ、子どものウェルビーイングの高さに直接的な影響を及ぼすか本論文で明らかにする(在留外国人総合調査,2020)。

(1) 日本における子どものウェルビーイングに関する現状

日本では子どものウェルビーイングの低さが指摘されてきた。ウェルビーイングに最も影響を与える自尊感情も注目すべき要因の1つである。内閣府^[2]が行

[1] 外国にルーツを持つ子どもの言語環境の現実と展望

<https://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/contents/115153.php>

[2] 内閣府 特集1日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～

https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/s0_1.html

っていた「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」は、13歳から29歳までを対象に7か国を比較した調査データから見ると、平成25年度、「自分自身に満足している」という問いについて、日本が7か国中最も満足度が低い結果になった。特に自分自身に満足しているか尋ねられたところ、「そう思う」という最も肯定的な回答は10%しかなく、他の国の3分から1-6分の1程度である。平成30年度、日本の子どもで、自分自身のイメージの中で、「自分自身に満足している」と「自分には長所があると感じている」に「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合は、それぞれ45.1%と62.3%であったが、この割合はいずれも同様の回答をした諸外国の子どもの割合と比べて低かった。このうち、平成25年と平成30年のデータを比較して、日本の若者で、「自分には長所があると感じている」に「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合は、平成25年度の調査時よりも6.6ポイント低かった。人生に対する満足には自尊感情のみがそのウェルビーイングを促進させる方向で有意な影響を与えていた。しかし、自尊感情が高いことがウェルビーイングが高いことを意味するかどうかは検証する必要がある。

(2) 児童期のウェルビーイング

児童期のウェルビーイングについて、Migliorini,L.,Tessara,T.,& Rania,N. (2019)は、人生における準備段階として、児童が自らのウェルビーイングについて認識することができ、それを最大限に引き出すことが重要であると指摘している。また、Badrietal,M.,Nuaimi,A.,Guang,Y.,Sheryani,Y. & Rahed,A. (2018)は、ウェルビーイングの向上や維持は、認知、感情、人格、社会的発達といった要因の重要性を考慮すると、思春期以前からの対策が必要であると指摘している。このような指摘を踏まえれば、児童期のウェルビーイングに関する研究には、子ども時代に高いウェルビーイングを構築することで、その後の人格的成長や健全な発達に繋げていくという目標が、研究的取り組みの最終目標として含まれていると考えられる。すなわち、児童期あるいはそれ以前の発達段階にある人々(児童)のウェルビーイングについて検討することは、児童期への支援のみならず、青年期以降のプロセスを円滑に送るための支援としても重要な取り組みとなる。一生の中でも児童期は、身体的のみならず心理的・社会的に発達する最も変化が大きい時期である(星・松田,2002)。しかし、小学生を対象とした研究は少なく、318件にとどまっている。子どもたちへのより良い支援のため、児童期の子どもたちのウェルビーイングの要因を明らかにするために、小学生を研究対象にすることは極めて重要である。

(3) 日本語能力が在日中国系児童のウェルビーイングに及ぼす影響

文部科学省「外国人児童生徒等の多様性への対応」の中で、外国人労働者人口の増加に伴い、親と一緒に日本の小学校に通う外国人児童が急増している。今では幼稚園から大学まで外国籍の子供たちの顔を見ることができ、グローバル化も進んでいる。

日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の言語別在籍状況による(図4)と、日本語支援が必要な子どものうち、中国語を母国語とする児童生徒は9,939人で、全体の20.8%を占めている。外国人の子どもにとって、学校やサークル、日本社会にうまく溶け込むためには、日本語能力向上は一つの要因であると予測される。

文部科学省の「外国人児童生徒教育の充実方策について(報告)」(文部科学省,2008)によると、外国人児童生徒は、日本語力の低さに起因する困難だけではなく、移住による環境変化、文化的背景、障害などによって生じる学習面や行動面の困難を抱えている可能性もある。しかし外国人児童生徒に対して学習面と行動面を含めた学校生活全般の困難と、その支援方法に関しては十分な検討がなされていない。子ども自身の主観的なウェルビーイングが、どの程度ウェルビーイング(生活満足感)を感じているか、直接本人の判断により評価するものであり、主観的なウェルビーイング(Subjective Well-Being)の研究と呼ばれる(Diener,1984;大石,2009)。

さらに、外国籍児童生徒をよりよく支援するためには、KINDL^Rを用いて、子ども自身による評価が可能な自記入版が用意されて、項目数も少なく、回答者(子ども)の負担も比較的軽く、在日中国人の子どもにどのような影響を与えるかその要因を探ることができる。

以上を踏まえ、本研究では、在日中国人の子ども自身の視点から、在日中国人小学生の日本語能力によるウェルビーイングへの影響の要因を検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者

首都圏内に在住する在日中国人小学生1年生～6年生120名を対象に調査を行った。有効回答数は116名であった。内訳は小学1、2年の低学年組は63名、小学3、4年生の中学年組は41名、小学5、6年生の高学年組は12名で、3群に分ける。

(2) 調査期間

令和4年(2022年)8月7日～10月13日に調査を実施した。

(3) 調査方法

研究協力者は A 学校に通う、小学校 1、2 年生(男子 6 名, 女子 57 名)、3、4 年生(男子 7 名, 女子 34 名)、5、6 年生(男子 3 名, 女子 9 名)、計 116 名である。質問紙はクラスごとに配布され、低学年の児童に対して、塾の担任の先生が読みあげながら児童が回答するという形式がとられ、中、高学年は自己報告式で質問紙調査を実施した。

(4) 質問紙「小学生版 QOL 尺度」の内容

Kid-KINDL^R (Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children, Revised Version for 8 to 12-year-olds (Ravens & Bullinger, 1998)) は、小学生の生活の質を測定する測定具として、ドイツで開発され、小学生の日常生活場面である家庭と学校における心身の健康度と適応状態を考慮に入れた包括的な且つ簡便な尺度である。柴田・根元・松崎・田中・川口・神田・古荘・奥山・朝倉(2003)は Kid-KINDL^R を日本語に翻訳し、「身体的健康」、「精神的健康」、「自尊感情」、「家族」、「友人関係」、「学校生活」の 6 領域がある。日本人の小学生の QOL 尺度としての信頼性と妥当性の検討は確認されている(具体的な質問項目は表 4)。

(5) 調査内容

本論文では、子供のウェルビーイングの影響をより効果的かつ包括的に調査するために、小学生版 QOL 尺度(柴田ら, 2003)の研究と理論的な導出に基づいて、質問調査を実施した。

質問紙は自己報告式であり、在日中国人児童に対しては、性別、学年、学校の担任の先生から日本語支援講座を受けるように言われたか否かについてたずねた。また、尺度 Kid-KINDL^R を活用して、「身体的健康」、「精神的健康」、「自尊感情」、「家族」、「友人関係」、「学校生活」の 6 領域に関する各 4 項目、計 24 項目を 5 段階評定で構成されている。各項目について、「まったくない(1 点)」～「いつも(5 点)」の 5 段階で回答を求めた。

(6) 倫理的配慮

調査は無記名、自己報告式で行った。質問紙を送付する際に本研究の目的と回答内容の活用方法に関する説明文書を添付し、返送をもって同意を得たものとした。分析の際に、個人を特定できる変数は設定せずに統計処理後の定量化されたデータを対象とした。

3. 結果

(1) 分析対象者の概略

本論文では、SPSS 23.0 を用いて収集された 116 の有効サンプルデータを用い

た。そのうち、男子 16 票、女子 100 票であった。学年別については、1、2 年生が最も多く 63 票 (54.3%)、3、4 年生が 41 票 (35.3%)、5、6 年生が 12 票 (10.3%) であった。学校の担任の先生から日本語支援講座を受けるように言われたことについて、「ある」は 22 票 (19%)、「ない」は 94 票 (81%) であった。

(2) 尺度の妥当性と信頼性の検定

変数の信頼性を測定した結果、表 1 のように、変数全体の Cronbach の α 値は 0.9 以上であり、本研究の変数全体の調査データの信頼性が非常に高いことを示している。

各次元変数の信頼性を測定した結果、各変数の Cronbach の α 値は 0.8 以上であり、本研究の各次元調査データの信頼性が非常に高いことを示している。

以上を総合すると、我々はこの尺度が一定の内部安定性と整合性を持っていると考え、信頼妥当性検定を通過し、さらに我々は全体のモデルの検証と分析を行う。

ウェルビーイングの結果を表 8 に示し、身体的健康の平均値は 2.28 (SD=0.50)、精神的健康の平均値は 2.20 (SD=0.51)、自尊感情の平均値は 3.39 (SD=1.02)、家族の平均値は 3.23 (SD=0.53)、友人関係の平均値は 3.82 (SD=0.71)、学校生活の平均値は 3.71 (SD=0.74)、ウェルビーイングの平均値は、3.10 (SD=0.37)、最大値 3.88、最小値 1.88 であった。

(3) ウェルビーイングにおける各要因の性差および日本語能力の検討

表1 ウェルビーイングの結果

項目	票数	最小値	最大値	平均値	SD
身体的健康	116	1	3.5	2.28	0.50
精神的健康	116	1	4.25	2.20	0.51
自尊感情	116	1	5	3.39	1.02
家族	116	1.75	5	3.23	0.53
友人関係	116	1.25	5	3.82	0.71
学校生活	116	1.75	5	3.71	0.74
ウェルビーイング	116	1.88	3.88	3.10	0.37

表2 性別と7つ変量の差異分析

変量	性別	N	M±SD	t	P
身体的健康	1 男	16	4.35±0.67	0.23	0.81
	2 女	100	4.32±0.55		
精神的健康	1 男	16	4.34±0.63	-1.15	0.24
	2 女	100	4.52±0.56		
自尊感情	1 男	16	3.32±0.95	-0.25	0.79
	2 女	100	3.4±1.042		
家族	1 男	16	3.79±0.81	-1.48	0.14
	2 女	100	4.10±0.77		
友人関係	1 男	16	4.07±0.72	-0.71	0.47
	2 女	100	4.22±0.73		
学校生活	1 男	16	4.06±0.59	-0.44	0.66
	2 女	100	4.15±0.82		
ウェルビーイング	1 男	16	3.99±0.46	-0.93	0.35
	2 女	100	4.12±0.51		

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

性別、学年別、日本語の学習支援講座の受講経験の有無が身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングの7つの変数に与える影響を研究するために、ここでは差異分析を用いる。性別や日本語の習得が求められているか否かは二分類変数なので、ここでは独立サンプルT検定分析手法で分析を行い、学年グループでは多分類変数なので、ここでは単因子分散分析手法を用いる。それを表2に示す。

性別は、身体的健康 ($t=0.23$, $p>0.05$)、精神的健康 ($t=-1.15$, $p>0.05$)、自尊感情 ($t=-0.25$, $p>0.05$)、家族 ($t=-1.48$, $p>0.05$)、友人関係 ($t=-0.71$, $p>0.05$)、学校生活 ($t=-0.44$, $p>0.05$)、ウェルビーイング ($t=-0.93$, $p>0.05$)には有意な差は見られなかった ($p>0.05$)。よって、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングについてウェルビーイングの性別を検討したところ男女差は見られなかった。

表3 日本語能力と7つ変量の差異分析

変量	日本語の勉強を勧められた経験	N	M±SD	t	P
身体的健康	1. ある	22	2.21±0.55	-0.71	0.47
	2. ない	94	2.30±0.49		
精神的健康	1. ある	22	2.42±0.64	2.23	0.02*
	2. ない	94	2.15±0.46		
自尊感情	1. ある	22	3.33±0.93	-0.30	0.76
	2. ない	94	3.40±1.05		
家族	1. ある	22	3.33±0.45	0.89	0.37
	2. ない	94	3.21±0.55		
友人関係	1. ある	22	3.72±0.96	-0.71	0.47
	2. ない	94	3.84±0.65		
学校生活	1. ある	22	3.73±0.83	0.17	0.86
	2. ない	94	3.70±0.72		
ウェルビーイング	1. ある	22	3.12±0.43	0.24	0.80
	2. ない	94	3.10±0.36		

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

さらに、日本語能力によるウェルビーイングの要因の差についても検討した。その結果、表3に示すように、日本語能力は、身体的健康($t=-0.71$ 、 $p>0.05$)、精神的健康($t=2.23$ 、 $p<0.05$)、自尊感情($t=-0.30$ 、 $p>0.05$)、家族($t=0.89$ 、 $P>0.05$)、友人関係($t=-0.71$ 、 $p>0.05$)、学校生活($t=0.17$ 、 $p>0.05$)、ウェルビーイング($t=0.24$ 、 $p>0.05$)は有意差がみられなかった($p>0.05$)。この結果から、日本語を学ぶ能力は、身体的な健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングとは特に関連が見られないことがわかった。ただし、在日中国小学生の日本語能力と精神的な健康が関連していた。日本語の勉強を勧められた経験があった子どもは精神的健康の得点が低いことが示された。

(4) ウェルビーイングの学年差による検討

学年別と7つの変数の差異分析の結果は、表4のように、身体的健康($F=1.00$ 、 $p>0.05$)、精神的健康($F=0.20$ 、 $p>0.05$)、家族($F=0.42$ 、 $p>0.05$)、友人関係($F=2.20$ 、 $p>0.05$)、学校生活($F=0.05$ 、 $p>0.05$)、ウェルビーイング($F=0.71$ 、 $p>0.05$)で統計的に有意な差はみられず、身体的健康、精神的健康、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングは学年による差は見られないことがわかった。自尊感情($F=3.07$ 、 $p<0.05$)は統計的に学年間(低学年・中学年・高学年)で有意差がみられたが、自尊感情は学年集団の規模によって異なると考えられる。LSD検定の結果、自尊感情については1、2年生の平均点が他の2学年に比べ大きいことがわかった。

表4 学年別と7つ変数の差異分析

変数	学年別	N	M±SD	F	P	LSD
身体的健康	1,2年生	63	4.28±0.56	1.00	0.36	n.
	3,4年生	41	4.32±0.59			
	5,6年生	12	4.54±0.48			
精神的健康	1,2年生	63	4.52±0.60	0.20	0.81	n.
	3,4年生	41	4.45±0.57			
	5,6年生	12	4.52±0.43			
自尊感情	1,2年生	63	3.59±0.90	3.07	0.05*	1,2年生>3,4年生,5,6年生
	3,4年生	41	3.17±1.17			
	5,6年生	12	3.02±0.92			
家族	1,2年生	63	4.03±0.77	0.42	0.65	n.
	3,4年生	41	4.14±0.79			
	5,6年生	12	3.93±0.84			
友人関係	1,2年生	63	4.32±0.69	2.20	0.11	n.
	3,4年生	41	4.09±0.71			
	5,6年生	12	3.91±0.92			
学校生活	1,2年生	63	4.16±0.83	0.05	0.94	n.
	3,4年生	41	4.11±0.79			
	5,6年生	12	4.16±0.62			
ウェルビーイング	1,2年生	63	4.15±0.47	0.71	0.49	n.
	3,4年生	41	4.05±0.58			
	5,6年生	12	4.01±0.36			

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

(5) ウェルビーイング要因間の関連

ここでは、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングのそれぞれについて相関を調べた。表5のように、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活とウェルビーイングに関するピアソンの相関係数は、それぞれ0.36、0.21、0.70、0.49、0.74、0.61であり、 $p<0.05$ であることから、身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活においてウェルビーイングの相関は実際にあり、有意な相関を示している。各係数は0.8未満であるため、共直線性の問題はない。

そのうち、ウェルビーイングと「自尊感情」、「友人関係」、「学校生活」の相関係数は0.6～0.8の間で、強い相関を示している。ウェルビーイングと「家族」の相関係数は0.4～0.6の間で、中程度の相関を示している。ウェルビーイングと「身体的健康」、「精神的健康」の相関係数は0.2～0.4の間で、弱い相関を示している。

表5 ウェルビーイング関連要因の相関分析

項目	身体的健康	精神的健康	自尊感情	家族	友人関係	学校生活	ウェルビーイング
身体的健康	1						
精神的健康	0.09	1					
自尊感情	0.13	-0.01	1				
家族	0.08	0.075	.19*	1			
友人関係	0.11	-0.05	.35**	.28**	1		
学校生活	0.01	-0.08	.21*	0.13	.55**	1	
ウェルビーイング	.36**	.21*	.70**	.49**	.74**	.61**	1

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

4. 考察

(1) 在日中国系の児童におけるウェルビーイング

研究1の結果より、小学校の時代で、ウェルビーイングの性別を検討したところ男女差は見られなかったことが示された。

身体的健康、精神的健康、家族、友人関係、学校生活、ウェルビーイングは学年別要因では変わらないと考えられる。自尊感情については1・2年生の平均点が他の2学年に比べ大きいことが示された。先行研究の多くは小学校高学年や中学生を対象にしているが、この時期は、第2次性徴に伴う身体的変化が、自分自身の内面への関心を生むきっかけとなり、自己の個性を見つめ、自らの価値観を築いている時期である(長田・林,2013)。この時期の子どもは思春期を迎えて、こころと身体が大きく変化し、周囲への反抗、友達間の人間関係の悩み、不登校、学習の遅れなど、想定はしていたとしても現実的になると、少し戸惑いの可能性があると考えられる(趙,2006)。そのために、低学年は中、高学年より自尊感情が高くなると考えられる。

日本語能力は子どものウェルビーイングに直接影響を与えるのではなく、精神的健康に影響を与えており、日本語能力が制限されている場合は精神的健康得点が低く、間接的に一部の子どものウェルビーイングに影響を与えている。日本語能力の制限のため、日本社会や日本の学校に馴染むことができないという子どもも多い。関口(2003)では出身国では当たり前であった習慣が、日本の学校では禁止されていることや、日本人からは奇異の目で見られるということもしばしば起こることが述べられている。また、森田(2004)によれば、集団行動や同質性を重んじる日本の学校において、外国の子どもは文化や習慣、外見の違い等により、時としてクラスメートにからかわれること、いじめられることもあり、彼らは複雑な思いを抱えて日々を過ごしていて、自信を失って、自身のバックグラウンドを否定してしまい、日本に同化してしまう子どもや、ジレンマや怒りの矛先を親に向けてしまう子どももいる。箕浦(1994)は他の子どもとの違いを受け入

れること、困難な状況の対処方法を知り、状況に合わせて対応していくことが大切であると述べている。言葉の壁の原因として、適切な対処方法を知らないと、「他の子どもたちと自分はちがっているような気がした」、「頑張っているのにうまくいかない」といった失敗体験を多く積み、劣等感を抱え続ける可能性があり、精神的健康が低くなると考えられる。

身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活においてもウェルビーイングの相関は有意であった。ウェルビーイングに最も影響を与える自尊感情も注目すべき要因の1つであり、自尊感情が高いからといってウェルビーイングが高いのではなく、他の要因も重要である。松本(2018)から示された、QOLを総体として考えたときに、多側面がそれぞれ独立して存在するのではなく、相互に影響を及ぼし合っている。各領域間の関係性は、全般的にいずれの領域間においても中程度の相関がみられたことが示唆される。

以上の結果から、本研究の仮説は、子どものウェルビーイングに直接的な影響を明らかにすることによって、在日中国人子どもの日本語のコミュニケーション能力が高いとウェルビーイングが高くなることは支持されなかった。日本語能力は子どものウェルビーイングに直接影響を与えるのではなく、精神的健康に影響を与えており、日本語能力が制限されると精神的健康得点が低いことが明らかになった。身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友人関係、学校生活において有意な相関が示され、日本語能力は子どものウェルビーイングに間接的な影響を与えることが示された。

5. 本研究の意義と今後の課題

本研究の意義は、小学生 QOL の研究と理論的な導出に基づいて、質問紙法を用いて、在日中国人児童のウェルビーイングを多面的に検討したことにある。一連の結果から、日本語能力は子どもの精神的健康に影響することが明らかになった。在日中国の子ども自身の視点から、日本語能力が精神的健康に及ぼす要因として非常に重要であることが確認された。さらに以上の結果は、野村・松本・鈴木・稲垣・坪井・森田(2019)にもあるように、日本における外国人児童のウェルビーイングに関する研究で外国の子どもにとって日本語習得の度合が重要であることが示唆された。よって、学校の日本語サービス支援以外に、家庭内の日本語習得などの支援もより重要となってくると思われる。その担い手をソーシャルワーカーに求めることも一案である。ただし、家庭内に介入する難しさや、学校においても教師とどのように役割分担を行っていくかなど、実効力のある解決策に導くためにはさらなる検討を要する。

以上のような新たな知見が得られた一方で、課題も残る。たとえば、外国人児童の保護者の価値観と児童のウェルビーイングとの関連を検討することが挙げら

れる。また、親や担任の先生から見て、学校におけるインタビュー調査および行動観察などの質的な側面から、外国人児童のウェルビーイングに関する知見を蓄積することが求められる。

また、在日中国人の子どもの調査では、自尊感情については1・2年生の平均点が他の2学年に比べ大きいことが示された。尾関・深澤・牛窪(2011)によれば、周囲の人々から「ハーフ」だから日本語ができて当たり前と見られ、自分でも「完璧な日本語」を求めたために、自分の日本語能力が未熟と感じ、「自分に自信がない」と感じていた。親と一緒に日本に来たばかりで、生活環境や学習環境に慣れていない、自分の日本語が下手で言いたいことがうまく言えない、クラスメートとグループで話していても話題についていけない、生活環境の中で友達がいなくて、学校でも友達がいなくてという子どもがいる。齋藤(2018)は、小学生にとって、QOLを高く保つためには、誰かに受容されることが必要であるということであり、ソーシャルサポートの提供の効果は、受容されてこそ発揮できるものであるとしている。人によって成長の段階が異なり、乳幼期、幼児期、児童期、思春期の外国人の子どもが日本に来ると、日本語を上手に話せないどのような面が影響するか。例えば、両親と一緒に日本の大学に行く場合、成人した人格が相対的に独立している場合は、外部のニーズ、友人のニーズはそれほど強くはないが、それでもなお日本語の能力の不足はウェルビーイングに影響するか検討することが望まれる。

本研究は中国という特定の国籍での調査を分析したものであり、分析結果を在日中国人の子どものウェルビーイングの影響要因の特性として一般化するには限界がある。具体的な提言を行っていくためには、他地域で同様の量的調査を行ったり、ミックス・メソッドによって分析を補足したりという形で研究を進展させることが求められる。

本研究でも上記のような生活環境、学校環境、友人環境をどのように構築していくかについて、家庭内での日本語支援や学校の教育相談の設置、社会参加の支援の仕組み、例えば、団地での日本語授業支援コース、地域の無料日本語サロンなどをさらに検討していく必要がある。以上のような研究の発展を通じて、今後こうした課題にも取り組んでいきたい。

【謝辞】 調査にご協力いただきました先生方および児童の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Badri, M., Al Nuaimi, A., Guang, Y., Al Sheryani, Y., & Al Rashedi, A. (2018). The effects of home and school on children's happiness: a structural equation model. *ICEP*, 12, 17.
- Diener, E. (1984) Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95 (3), 542-575.
- 在留外国人総合調査「子どもの教育について」2020 株式会社サハリサーチセンター
<https://www.surece.co.jp/contact/> SRC 情報総研
- Migliorini, L., Tassara, T., & Rania, N. (2019). A study of subjective well-being and life satisfaction in Italy: How are children doing at 8 years of age? *Child Indicators Research*, 12, 49-69.
- Ravens-Sieberer, U. & Bullinger, M. (1998). Assessing health related quality of life in chronically ill children with the German KINDL: first psychometric and content analytical results. *Quality of Life Research*, 7, 399-407.
- 柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子・田中大介・川口毅・神田晃・古庄純一・奥山真紀子・板倉洋治
(2003) 日本における Kid-KINDLR Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討 日本小児科学会雑誌 107, 11, 1514-1520.
- 柴田玲子・古庄純一・柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子(編著) (2014) 子どもの QOL 尺度その理解と活用心身の健康を評価する日本版 KINDLR 診断と治療社, 7-11.
- 川喜田二郎 (1970) 続・発想法 中央公論新社 48-89.
- 大石繁宏 (2009) 幸せを科学する — 心理学からわかったこと 新曜社
- 畠中宗一・木村直子 (2006) 子どものウェルビーイングと家族. 世界思社.
- 尾関史, 深澤伸子, 牛窪隆太 (2011) 日本国外で成長する子どもたちにとっての日本語使用経験の意味 — 子どもたちはどのように日本語と向き合ってきたのか『リテラシーズ』 9, 11-20.
- 星旦二, 松田正己 (2002) 『公衆衛生』医学書院, 119-125.
- 野村あすか・松本真理子・鈴木伸子・稲垣美絢・坪井裕子・森田美弥子 (2019) 日本における外国人児童のウェルビーイングに関する研究—日本語能力との関連から—学校メンタルヘルス, 22, 1, 60-70.
- 齋藤美菜 (2018) 小学生におけるソーシャルサポートの受容・提供が QOL に及ぼす影響 臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科, 16.
- 文部科学省(2008)「外国人児童生徒教育の充実方策について(報告)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm
- 文部科学省 2021「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」
(2021 https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021406_01.pdf)
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室 OECD Education 2030 プロジェクトについて
https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf
2023 年 11 月 23 日アクセス

在留外国人総合調査「子どもの教育について」2020 株式会社サーベイリサーチセンター

<https://www.surece.co.jp/contact/> SRC 情報総研

（よう ぼさん / Yang Mushan・修士課程修了

さくらい みか・教授

すけがわ あきひろ・教授)